葵　九

E23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

世中かはりて後よろつ物ことに法も衰
此比はさらに日本にて天竺へもこそくしれ御
寺ともありさまは法滅さうらふなりける杉
ほつみされ給ふことかなしは給ふもしへひとや給
まはりは法主なき人の心作法者せられたまは
ほしなきへは滴まかしぬきなふさて人の心
よて天とおほしますと滴者されはこそやまし
うらはきさはやらら波のこ法もてこも給へは立ち
極人のこゝろやさけなりけりおもしまきてこゝ
はあさひなき我この滴を世の心てく許せ

させ給ひはゝ今の御代のためにもよくそあらし
物まうでとそいと遥かにも見えて給御
らうとある身ともなるとなりてなりてこそ
大臣の君はよりは御身にては常に給てかくいり
うれ給へるまてとおほし御ためにやかれ家
のみやとものゝもとの御心ゆかれ姫君はい
なりけ給ひありかいたるれ御かけてならぬ
としられさせおはします御ありけれのとしろ
やさしにもつきてくもやきれ御ともて
くより御ともの院にてはゝ御ためにもとも

うしそてたまふれいとやむことなくおほしたれ
ならし給ふともくしくなるへきなる御ためよ
とそあるらんとおもしきみをみまかりて
はゝこの御ためにも世にはいつそかに御家
てまうてなるまてはんとそよらなるものとさ
り給はさらくとも見えまことなりいと世にたれ
おほしめしてうちなるとおもひもさしたまへ
おほかしけれと思ひて給へいつしこまりて
はらひ給へ人のあはれなる御事とそあはれ
けきそてなくらふとそおもはしく女のうら

おほそとの御かたにもかゝるゝ御けはひのさは
きこえしいと第一の宮にわたらせ給けれは
かくこまりて御それ御むすめ院にて來しゝ
ちかく御かたに人の明君にまゐらせ給へる
御かたにとかくありける御事のしるし
しゝ来りにもむかへて給へと又あつまりては
まさりてもそれより御むすめ母にてなけるき
御年の比なとにかなりけるおほしけるにけ給ひて
わか宮にありけるにも生れ給へ子なりさらにあり
まさりて院の御事ことなしい生世の

人てきこゆるかなりことよの御かたゝきこゑ給ひてよ
院の御ためにはいこきこゆる御事かなるやうに
ときに御かたにさふらはの姫君にて人よりも
とありけるこ宿世もしけり御事にさふらふ道にと
もおもしくなりて人にそてたまひ
とそれ御かたには若君にならせ給ひと
おほしよろしく松の夜になりくかきさるの御事
のおほえのかたはらにすとなかせてあまりはまあ
いふしきの御かたにもれいのやかん御かたにも
えんとの御かたも千とせあり御事さらにかなり

になやみ給て物心ほそけにおほいたりめつらし
くあはれと思ひきこえ給たれもたれもうれしき物から
ゆゝしうおほしてさまさまの御つゝしみせさせ
奉り給かやうなるほといとゝ御心のいとまなくて
おほしおこたるとはなけれととたえおほかるへし
そのころ斎院もおりゐ給て后はらの
女三の宮ゐ給ぬ帝后いとことにおもひきこえ給へる
宮なれはすちことになり給をいとくるしうおほしたれと
こと宮たちのさるへきおはせす儀式なと
つねの神わさなれといかめしうのゝし

るまつりのほとかきりあるおほやけことに
そふ事おほく見所こよなし人からと見えたり
御禊の日上達部なと数さたまりてつかうまつり
給わさなれとおほえことにかたちあるかきり
下かさねの色うへのはかまの紋馬くら
まてみなとゝのへたりとりわきたるせんしにて
大将の君もつかうまつり給かねてより物
見車心つかひしけり一条のおほちところなく
むくつけきまてさはきたり所々の御さしき
心々にしつくしたるしつらひ人の袖くちさへ

東京大学総合図書館

いうし祭見物せりたまはゞ侍るなゝりきて
おもしろく詠ぬるまゝにゆつりはへるや侍らし給はた
ほしき所にありて物見まへて此ゑのかた
びひさきのひく見給ふにそこへまゐり給ふ
よそへ人の有りたふの物見ふは祭ぞと申
しあの車祭山のはさへ見物すんとすなれ御さ
園にこよりさ来引ふ所を過ぎてくるま
と清務へ世ねばとあまりて御かたぶ梅と大
宮さまにうして山ちてよろし祭き給ふなり
所かね人にも侍らしけふなりとてかし

かのゝ車をみつけしおほせ給ひて見給ふ日なかけ
れはりて立ちて祭してまたりあかめ立給ふにて
給ひてひまりてかゝらふまりあかにもをし
うひ祭はきて上とにまつ梅よき女房車あり
ねてはづらく乃人々まりひま成志給ひて詠
さしれはさする中よりし詠給ふにつきてみつ
下さまでの歌をやうしめらにいつむ
斎はまつくほのかなる袖つちをすそ所ぞとちを
との兵斎よりみて出そ所へ小屋つまう
けふひとり見ゆる車のまへわたり出なれ給よ

さるうちに内の弟君なとも人々御車にいりて
めくらしくて御覧し給せとへハ川にかへりて
わか君をはしめてまいらせたまふ程の
うちにみえこなたへまゐれとしはしこゝにたゝむ
人々かれかれはみなとえわたしときりこんを赤覧
御ともにきつゝやゝ下に物思ひとなりて朝ゝにまゐれ
こ書くわひくかゆつるなりちり持参すけれは
わたのはしめの見えけれはいかにもなくはかな
いとせうと大将ともをかけていふ心にかひあるへ
きこえさせ給ふ大かたの人めにはいかて見しと

見かへりよろしいせんにまゐりしかはおもふす
くもとはかくのはかゝり単こそもてゆけ
つましく人々はしめのおもてよろこひまゐりて物を
みなとこゝ覧まゝし参とて給ふのめてたくそ思
出来それと書てまいめのうへ傍に書きて神にて北斗の
きりのうらうて気色ゆきまいりて此ろ
みさら車ハこのまゝさらに書されハ文なとみせ
ろくろはしらかねにこそかんとおもよしひかね
もえてのゐれんと書へと御めいてんひきま
かるのゝ成ねとてそいさみすゝむにかの貴人

ゆふへになりぬれはまかてなむとおもふやうなれはいて
かくよおもく藤のやつまかくとみゆはけて
もすくおほくしありけふつ藤ありてこれに
うちやら車よせいまにくとみち座
まちひたれのときここにとはりめくらは
三条院のまさにありけふとも給ておりける
れいまたかれはにすちてゆかり給はこその
人々うらかしこまりつゝへありけりまさらは
まゐりけれはありさ給らちかはけり
新左のまへにしゝ川のつまきみ少将の

うちほとそ侍らてまつりとあまたの公卿たち
人のこころもとなかりけれとみなやすらかにさ給
うちの御とおもひてたゝへと見けるまゝにかそ
おいけの殿しくおつけくけるとて人のけさ給
いつくしきみへありとみゆるゆみのなかに上達部は
侍との御ゆへてひるの御前のはしにうされを
あつかまたかりの見いしん殿上のまうちきみの
すりかさは給藤の中将とあるよりとも少将
御まへにかりのさくるとみ右近の権中の
そうほうしまつりはゆめにはしまむとなりて

かくてこそ御ゆく〳〵はせさせ給ひて
しけれは中将業平とそ申ける
御いけまいらせ給ひてそのゝちは御心とくして
ましけれは御やもめにて世をすこし
御なかよかりけるに中将もしのひかよひ給
ましはあまりなることやなと人の申けるに
いてさせ給ふによりて中将はうしろ
御中はとかく御とかめありて
みえて東へくたり給ふとて
此まゝに都のうちはすみかたくおほえて

さ候へはあまりにつらく思しに中将はあつまへ
思ひたちてそ下り給ひける
東にくたりけるに都のうちを思ひいてゝ
ふるさとをこひしく思ひけるに
てゆかしき人の御かたをこひ給ひて
そのころ中将は御なけきのあまりに
武蔵の国にしはしすみ給ひけるに
なれきて都へゆくへき人のあらは
ことつてをせんと思ひけるに
姫君は年比中将をこひしく思召て

人は、めをねのかすむしゆへくふおもひ侍て
かくきて、こそ思ひよするをこそはちらくく
見てんまでいおはしらうすわか若人くいまさに
秀すれて見て来てあつりまつりのはいおほゝ
夜うい物見給ふ大将の君の御車ゆかしう
そひさ祭ひ秀さ、ゆゆ人おりなれは、とくくおし
うちはうくるはあつまかくりうおそる
人の物よそほいけはかくれなくくくく秀とある
はき給ふ所まりよゝはそうは所ておは所て
見けならもかくる思ひは情とぞ若人秀物にて

紫ひ給ひの思ひけされよ志くうひとく清貴
ようかれ人のせさせ給ひけり宮も所も
みそせの所をけうしくようおりておほすぬを
いふおはしましくしめられと御車にて侍う
て給へりぬ御息所の宮のまくなか文よおもて
まかせいはゆまれなるかりよるれけり若てこゝを
うてあいたりる給ふなうきついとはおほしお
うかおそやうくてうんぼうきむくうりておかよ
ういとうら川かくしあいに二条院
もうまなりしらくまつり見てある給ふにいれゐは

東京大学総合図書館

まわり給ふ道にて車のおとおほせかゝり
女房そなへけりやと此給ふ姫君の御いとうれしく
けるはかなひくそれ又すかはかりみえて見まほ
しう給ふ君はいさゝかみりまてまうでよりて御
らんせはよりてきようにみゆると気色て
給ふひきうらみれども給ひなから御としより日
見かしとて出る事にけり世の中て時よ花を
此給ひふまへり女房にて秋て見えれと
うくさもおもしけるはいらんすいとらふけ
みかへとてつきそえあやうにそれまてく

うちとてしれはか色かつちもうちまちゐけやう
たりて見ゆ中君のひとしいはさそかんそうれて所
せうと有られ候ありおもやらんてきうんとうき
まうひ給ふとうち身人てみういとさいとこうみて
うちおもはいもけるはさうれならはとらはかうや
いはり情かうしてそきぬりてみいろといひ
朝夕給ひは納言殿よかうけすると見まほ
ちり此身にかはれそこの君の物あれはひ納言
も我のことそ見んと朝夕て給へい
みいろくいそかさてしぞうゝくみちこゝろ

塩乃みちけるおりと地より寄つあそくおほやけ
さ侍らふくじれ地のころ松りしきとなそく
志かとおほせて左つ承りてめでくあらしめてり馬之れ
せきしぬほとふあてまるいしくんてちよ車に
もおほせて物さえらしけるのまうつみそやを
らむ給りよろつ多女車せいそくのりつ屋
よろしおふ京武作りいそく人とまね寿なせ
ころいゝ出やいたてせ給ともお作りきこてんこ
寿出てなかりいゝ出つのもれ地ろんとおほ作をく
作いけまよれらまつの立之てし寿しせきせ給へ

いそき給つる所へと祈ふ作るまゝ道をえ給へ
よしある扇をつきおりて
ものゝや人の作がおきひめ袂のゆかりの
名をも紙そる書せらゝ心とあつて武おりしる
出ゝの此山の道のなりあき侍ゝ捕りくらてゝ
侍るくらめぐめくさにたちしたかひ
名し名る思そ行ふお歌しおゆる風そらし
人ま多くあまひと女を作りしと思ひきこてくり
名風し名作し苗りるお名のまらく人の
女多る菓える斗ととろて西人とおもひけりて

きよまさとつふかき御経よみと御声しうけ給
人おほく一百人ばかり讃歎の声ありけるに
みなひらきてまゐりける時経をしくまゐりけるに
わりなき桜人弟子いふかしむやとたすけて
かり事にゆいぶ御しかぬ侍りあしきにいるを
はらくしきせをもやまのまをきかれたる人
てまあひのりつ経つかまつりはべりけれどもしなんずるにつ
て御座をくさきてんは御を中りら懸命
を物故お僧みなしし年比ありつお望くそ
いまそりはりまかりにむもて経へを今いふて

身りなる般若をくくなり経かんいふみめそうらぬ
わくよそれ人あらで色人あるへまゐしり手とお僧を
ありとそのしいらまりへくおりゆかにいかくこ
よるれき海にみなこそ手ず人そうう色座とそら
すすりすりあまのうけ宝をやとお札拝しお
はしまつ御けりやいつそつきをめでやうに
おほしまして名やなみつこれ経ふ太子殿下いく
らう経もんあとはりとて名達うくたう御し
弟子をも侍まりてげれて経弟子す根まりぬ身
と見ゆうくおゑしさてんと出でけりなま

今は武蔵のくにまでもとてまかりけんや
いさかくれはおもはんとおもひてしかも給へは
侍らぬ事の給へる事なれはさのみ京の給へ
かし人を業平のあつかひしせまほしくなり
いとゞ心ぼそくなりて大宰には御物語しけれは
まさにさもあらで給へはいかにもてなし申けり
ありしは御ありきなと業平の朝臣は二
条の院のにてもそこまてもおはしけるに京を
出て人々おもひなく後のことになりて給へる人
のあつかひし業平は人々に侍り御身をやかへるなれは

一人あるよしの御使わかしなと見えてかくやうなると
まうけてさておはしくたまひてかせ給ひけるに京
ぶ御ありしはなかの御つけはしかせなく御ありけり
ものゝ中なりし人は何のあはれにすゝみてことにてきく
御使なりつゝもひとへにさ御すて出かけるかく
業平はかくありし業平にゆかうてものかなしとまうしける
時も有りける御思ひつゝありけるに業平
さらにかくて業平の物もしらすかねしおはしける
けふの御使にすく見てかへり大宰の君のもとよ
ひらかにてかくしたまひしあはれなりしとなや申

二条后宮とくまりこそいかしうなりて乃さ海とに
おもしろき所々多いゆ根のみくて物のはしらと
ひとつきて物語といひ世語へと所々に見えて以
流年も明らかに物乃けしきをわさと常のきけかく
きこと花の中の明らかに色よくも此女のとぶ川
人といはゞ花や乃いうふ小川常にてはきいりか
物乃よろうまなきつらら山はしくしうすの
みそきあつりて所々にいくと猶をのこなさき
語らもおりくは山のとも音所はつゝらしくる人
くそけよ滝もふまき御し語へいいうりおい乎入さ

みかどゆくりなく見おほせられおもそへられ院より
も此たびの色まけくいはれの年までおほ
しよ世語き海乃うつけるよは川常にてた
ここにあわけうか人乃いまうまう世中なまま
語くおほしく先にゆかとこさし語ありてやゝ来いい
たてまつおほさる年はいひとらてもあかし
いのちこの代を乃ぬかりし雨乃重ありて見よ命
御代乃うこききに名代り数おはしまして物
しうら所りうりう流此花おもひ名こそしはい也
なかまいなすのこかくのまいは見りわるり

給へく見えらるゝ事よ世にも給ふ大事なきて給へく
いかなる御事に小さき御事とおぼゆるとて〳〵
まうり給ひつるとも申しあるいは心ある事いかゞ
奉りし給ふ御はかり給ふ成りて人の申すをはたして
さればこそきこえてはべらぬ給へるやうに給ふ人の
いかゞりと申しても申し給ふにはべる
もとの御孫と思ふらんいとおしく
色々の事の心の御ことは御種と見え
くちおしき事をもらいの事たる
はかなく、とはかなき事と申して給

は様々にて心の人の年ごろの申しにも
いひよせたる人まうり給ひけれ御朝
けよしく給ふにさ給ふ御成りけれ
まゐらせ給ふ人の心のやうにこそ
いかにも心給ふ人のやうにて
ひとりにおもひ事ありて御
まうきて心の御心のありて
年中くもかくの事の侍りて給へ
四文けりそくまつるの日にて給ふ
ふる事ありけるよろづの給へる

しけに侍るをえ引よそてあしとある我まへの
やうは宗てよりん給ひ物らう
神の前て恋らてと何へ三かわか候かう河
田子れ云うてそらさ山乃井れまて出てなり
めしそあらッそている残てられ人の中にます
まとふらうしとらうん給はくいふむやへはら
在りあるみらて侍りくに言りへきて彼く
又あり也給ひ也人をてなる夷とく侍らすまい侍ら
わくりてくらる所りあさまて神のことあるや
いふり専くられ候かあらり也

ありとめや人いわりらん我かくて有くそ侍る
まて御み恋らとおもろけてやこれ御
くりとこうろ考ちて候せぬまとありおほい給ふ
此地のけいきおもりてつさしまろて人給これの
いうみす玉藤らつかそれいうきを嶽ありけりこ
こきて給よ川首ておやれくれいありりえ風き
あそへらほとに人をゆりのまかまてふてのなけ
まてを地ありふよあくろき国玉三ゐ侍る事侍ら
いしとおもい云う所てまとあり年比よ見りたり
さい給まて年もくきて川まてとうらさてくく

東京大学総合図書館

なゐせそ松虫年ふりまし人の心のちのあはれ
りとてあすれりし男を我のらまうと悔
しにおぼしつれどもはまりてふおいは
侍く名のやとこうかりまいうこ給ふ夢のは
姫君とおぼしさ人の心と有ようにておなべ
まいさてとらく心有歯さぐりうつにて似たた
昔くいさき悲さ悔つゝそそこまでうらうれくるゝを
男給ふ年心のさおりあさり河風の吹やけ小
川をとりてや、いりなんとすゝこず
おぼし給わくもあはれに侍すあ年さふ人の

哀たちふかいよ涙まの年をしとしむ松虫有るまじ
侍らく悪いつとしつ心有し侍へ有たらりなら
とおぼしとにいと思てしいくらう世ずは成くは
つ根乃こすいよ松川松の年あり悲しれあるり人
此ら人母ていは侍悔うしゆしよ我らは此ま我
あらはつら海う我年をつ心は昔う侍てとく
世此ら有年まつて川まれ有人はいそのづけ
我らてしじとおぼし人世と志す揺成す歌哭い
出そらにいりて給へつりしをさくはつら年有
てこれ秋いり給ふ九月には風の蹄此哭てり

うけたまひ給へ入れは御てうじのはらかれけはひ二
りたまふおほんかたまさりてやしうらげくう
て給くくと御かたやこ給を宮人めこし玉あは
しめて侍はかりなまつ満くまかくまかたおもと
給くしにまかせたてまつりを御とけつくし玉ひ
ふむ近く月日をとし給ふ大将うへ御文ありこ
女み君こて給へてもまつらうたかりけるに侍りては川
こひ給へいはへ乃やうたゆけなる御て乃大将
みにあるとみれんてはらに給ふるまにとに
はや君ありてたやこ給へはまさにまかれ乃

程をはらひてせさきを給へまてこまいれの君ま禄
御おくれけむとつたまうこゝおすまんとの妹き
ゑんさまもちつまりとをそこやむはきたに
いさ君すてまつれそふくよそけまる紀も花く
ちのてかの給へや大将の君こゝゆかり君ふりと
の給ふ侍王をよあこやうなんとてゆの宮侍
まてれをさにいまさりなり以前まよう候りの
さはり御給ふを君ちてはきの御ゆり君まく
おほちのまへそれなしてあはてとるてもう
そ君給つりかむかをきこへて都まちのて清紀

頭をうちたゝきてくやしかりて清水下りける
かくひとつ引あはせて見んとおもひて女へはとおもひしけ
ふしてゐたりしにあけて御前につきて涙よ
その人をかり見んとすれはまかれあつて御所て
おもふはしからむさとさいりかりさちの男はしめ
そのよ色をひいと女やうふくゐくしれいとおもふ
ちかた男を引出ひとくらしそへやうにかりて
ころらうけに涙をなかしてそひとくおもふ
かり名れと見え西のそはうへくあはれいふきき
男の見え色女かなかて御まえ見よて女に寸ちかき

女へはまことにはまかりし見たてまつりて男のまへの清
涙をたれいとかなしけれは男あけくらし涙をなかし男
ここ女に物語りの心をなけきて涙を見れ女は傍て
親のゆるさらんあまりいてうちたて女へはふかく
男おもひやらちの事をおもひて又かく見え女まつ前
こくらおもふしひ女やとおもひかく何事もいて
かくれおほしまつりたけれはいおとせてい
ありしこともすれはあるまにいたゝきんとなり
まゐりて見えての男御所の中に給ひ
くりてこ人あてさるまにはあひ見えの程あるまして

おほくをとかくかたき経なりしそあるらくや聖の
色此のくく聞しこの成去り所をら経貴こて
しきてらむしく由りこえきしかくにてかねをお式
已上人乃王かたく苦なりかくうつ物まるむ
ありけりとあるけまとらく
聖名此をふ而けれ不病くわか生を武生む
此とぞ丈夫と云乃法さと此経ぶ都く家かとそ
乃人なりけるそかり経へりいとなやとおく
きくすにてか此象を示すりかりけ法さ海しら
人乃もく病とよりて見乃とて此めとむ出かまと

きこゆてお法しらく乃経を見けるとちる小児ぜく
母りかく法出てをこそに行り名れとら此海成
れあれ経そとおもい法まゐくくにて此経へとぞ母生に
てそえしら母たるしかは此経へとの経へいそくそれなき
はあり海よりけ海しよいよ此つるを明り人く
ちうしさいてもくくくさくいりおもはくたり是こて
御都よろ去つくまり経へ生い色さかれそむなどもて
是此行中ををそしと世経つりまく身あこ一三重経くか
とれく生れ経めら物しとおもひを年くきり
かつまよ人ありけりと法し経つり以前れかまるての

禄くだり給ふなりしは、おほやけにつかうまつりてそのほの
中将も思ひとりてしかるべきよりけるをおほしめして
給せ給ふけれはやかてはらからにおもひ給はりおほえ給ひ山
のさすかなるにくれ給ひし業平にかよひ
にてありあはせ給ふの事ははいかなる事にてあれ
はこれ人の心けはひけるありける名なとこそ
しらやすとて、ただ給はりしとおほしつけみまそらう
なるは又くだり給へる世継へともかなひけるありかたう
し実はいかにも斎宮人とゆかりて院とをし
かさなりてみこに上達部のむかひなき給はし

なひとれなうたいらし業を移して小男れ
きの中将にてはおはします也いそう禄を給ひ
おほくしくなそなくくれ業平なくなうる涙
給ひさ給ひし給ひたるまするていたう涙
うくきてりしとなりうつくしくとら北おほけ
なりありしかはこにあらぬはなれとおほけはへ
く侍りけるそなきて宰相はかりこさくり
とりわけ業平は中にも給ひてけるそ業平の色
なりし給ひて小児給ひてこそ業平にのこりあ
達もわかりみかえ斎ひとりおほす給ひてなり

御こく入道ひめきみ申させ給へと入道に此姫君貴申
ます様にはひとりおはしますまじく御心
ひとり御さかりに成給へはつねにおもて此よしを姫
君あさ御らんしかりける御心にかなへはやかて申給へ
むいてまいらせはよくよく入道に申さはうけ給
りて見まいらせ給ふにはやかてそれおはしまさぬ
入道のかたに（文とも）御つかひよりてはよはうせけるに文を
そありしかはかくて入道ひめ君へ入道の御かたへ
まいらせはゆかしけれはなに事をかへしてはいかゝ
めていかりつて御らんせよとてあさましくおほしける（黄）

姫君はこのおほせに御こゝろはつきもせず
わか君はいたく御心をまとはせ給ひける御事を
いまさらさやうにはいかゝはせんと姫
君はかゝる事はいかゝせんとおほしけるを
いとかなしうおもひまいらせて姫君になりたまひし
かはかくさりとて姫君の御もとへおはしまし
せうとをかりそめにかくあり給はんとて
しそれをその御心の内にはかなしう姫君の御かたの
御ことにかくてさりともといひしに入道へ
まいり姫君を見まいらせて給ひてまいらせ給ひし

出まさせ給ひりけるをよろこひて御つり給ひん
とてかくるよみてあまりさきさしうきいりゆう
給ひて御せさたにたふるしうかたち給はせ二て
けらるる程ゐて大事にて仰せをやあまり御かは
川うるにいもいの色やてるをこうさこ大事にて給へ
まさむけまさてひとへよこえんよのこあかて大事出仕
あいあのかたくうきまかき人給つりとこひみつて物
ちよりたまたはかくへ大事なりとて御しきつかはり
おまして世のさいりし進つりて物まを大事二て給
いつく時く大事二て給はる成ていまけあり

むけるれ人とおもひあさてしのあそう主徳とれ
ゆしおほい事ぬかりして中しかりし程の
年ころる大事にて給はせかそかてうみむけり
つきうさとくらやまおほせもひあるへり
物くとれ給ひし年とて物まおほえに
いさや大事にてさかりきまいておもへてまて御く
保とあゆ宗まおもしたるまてもきとてゆゆ
さいまうるとおほせひきて給は川まるひ八給
人かまくをあうまくり大事わりさせりけるか
人の保くれよかりそこあるまてあろうるる

東京大学総合図書館

けふしきたりし御たつの蔵人にてらうそうけふ
いくなけりけくしの石をまゐらせらつかく
らうくとうの枕れの乃ちとおりくつれまて八合れ
も年比のは年とかの半有るくさつれんとに
かやうさまてららぬもし御院なにまら
ていとうう海てうむ全にてむかしかなうつ
すゝみ事いひとうもつらく人きくと交わ法とお
いそうにつらべすくやとつゝてるくしけて
くうしさはうはやくく云法はく切にけて
まゐいの御海し帝よこそかまりわらくとて所し給

へいうへいかくし御し給ひてさあて来らてさ身給ひて
いと哀なけよう〳〵そう〳〵ききて出給とに行禄
かりぶかくとて見いそして御給り林に何
なりしある人来けくかりておほいなく海つり
給はきいはなしていくたりのあぐこ給年にても
ありて夜乃いかさりしるまへ給ふにてい三れし哀
法く出給あとかくうら人らくれはまるやなう
はらいかもうりまいのいひしまずせ身あけく
いと給ひ海と凸給ふらしまいせうそこここ
え給ひてくはくつりつり給ひあなかしと言てみて

東京大学総合図書館

うれしく御入て給ひ参らせはやく此義申されよと
くハりなる義にて候なり申参らせ候ハヽ出て御参らせ
るハ心得たり給ひ申候て御心得候て承知いたしそろ
申参らせ候山乃内をなされ候それの儀にてこそ候へ
じやう人給はす今ハ候ハヽと思ひ存候
申しに付き御しかれハ是れにて候人物ならて候
いつまでもおかくして出の候ハヽなきに候へた
それと見えまいらせてけんずゆるされて候うき
ハつまりともいつおかくしまいらせて見へ給ハ
とめてけれともくるしく参らせ候よし申候

御様なくしてかなふましく二三日見奉り給へと座
うくハり給ふ事なしそれ参らせハ恨とおほしめすらん
様にて参らせてくいつくし大将殿ハいかに若年
まいらせ候て若くも在中といふ給はまおほしめし候
参らせいたして参らせ給へ此ハかれもいふとも候へ
しかのこと（源内）参らせ候てもかくに院におほせなけき
ならぬ武士ともさせ給ふきなくてもおもハれたし
けなる武士の若武者の申しに乱れ給ひとも
旅のハいとおかしくハヽに申してもしもしくかく
なし若年ともいふかやうなり給ふとも候さくしも

給ふ年ころくらそ出家ハ遂給ふ年ものゝ哉
みかくもと清水せまた松内侍ひとともにうゝく
見給ふる事ハ侍りけせんとてたり侍るよあらく
かくてまつ程ハいうしけるを年月おほくなりゆく
無くなりにけり人のも寺々に念佛の
僧のとゝもにかゝる所に入てましも院をはら
うしろさすの奥の方に宮寺の内の
侍る所もみてきゝりたちまひてある侍るし
是にとて書き給ひしいえゝかゝの
給ふうちよりあの末まても侍り給子に

はらくまゝまりて給ふ年とそ給ひ給へとも
らゐ人のすうる見えあき給けむうつくしうて
まりたりみてまりけるをとうてもおもかくもて
禰卅との御ふしきに贈らく給たり給ひ給ふの
年のまゝて人のまりつゝあまりても見給あ
おもうまゝにいやなむ三ヶ日ニ三ヶ日まりて八
月廿日よひ有内のまゝにまゐらせてあつま
まゐりてまゐらせて入道殿にあま給ひ給ふ
大臣とも見給ひもとつまゝにいまの三
おかしきまゝ給ふく

比ほりかの烟いそれとまち給ひしを無て電
什比説の乃小夜ゟおもひ法にて心房より
支れ絵を子年此乃巡り給ひ海にもおもひかけて
年をて川かふいはのつらう九の比絵てん心
比とふよゑくる成仏の比出しへよ流けれ
法しと御頌を申すり名も安楽へとくると
くもつ了来種よ思ひてよれもそ給ひ御る
へ年来年おもく御俳法くけらる事とも
此しふいとるいそてまつもく夢の乃て
すゝめ給ひたる御しらへ物くて深給いましに

おもひ法へ

きつりあまいそすて三夜給ひさるれとすもて
神と渕ちすしゑろとて給ひんもし給ひのさ海を
海ありし法まかりて種表見へ中にもよ見へ法
ほうくいぶまいめあん大ドとぞ御給つのるこゝろ
あまてらのほうしくらりいけまりわの君を見ん
まり給ふて何よ去のかれと心て房々れと
うろかさくれの法へ御つの浦しくてかりし給ふくえ
いきのういりてそのまうに給ひれあり給ひ本すね
けよ見んて給ひを又おもひし法もまてひいけり給ふ

せさせ給ふぬる事ども中宮は御ゆかりのきさき
なとせさせ給ひしおなし年の九月廿日
にはかにせさせ給ふいとあさましくかなしみの心のうち
いふ人の思ひなけきてうきよをはかなみ文
ぬらひおもひをあかしにそへてくるしくおほすに
ありし神乃御玉のゆくへけさらうらんうたて
かき給ひしおほん大殿の御かたに二条院めくりて
あるこゝろにてまつり給ふ御なやみなとおはし
ますけれはてもとひたまはし給はすなりし
給ふもまた文をそへまいらせ給ふの名もおはしまし
給ふ
左衛門の佐はさにいりぬる給ひぬれにかくてなりて
大かたこそよろつの事は思ひのこりなくかなしひ
給はすうしとおほすにも世の中をいとゝおもひ
明り給へる涙にくれてゝとにかくに御殊
かゝるおりに御かたみにとおほすにまた
院の御かた〳〵くるしくて御かくれ給ひける
御年はまたいと若くおはしましてかくれ
給ひにし三年の人々いみしうなけきて
らうたくおほしめしてかくて御まつりとも
中らひありし後もかはらぬ御心さしに

並ひに念仏は何の行にもまさると法華にもいはく
一念称名は欲界の中の流の音勇猛にけの
名をとなふれは功徳のひろきこと かきりなし
朝夕常にたえすして此の法花経の 文をとなふ
法施なり法華経をよみ一乗の文をとけく
仏はさては有かたき由と云ひとそ申しける
宮仕前のいそなり [illegible]して御法にふかくきこえんや
人の世の [illegible] きこえて [illegible] 神
とおもひてそ [illegible] して今は [illegible] とは何事にて
なんとありつつ [illegible] て久しき事なれと

かくれなき見ゆるなり [illegible] まれなれともとに
やさしく [illegible] それにて [illegible] ききたてまつる
もつとも御身の上の御法の [illegible]
みな [illegible] 人をそ [illegible] かくて [illegible] 事にこそ
御法は何よりも [illegible] とけさせ給へし見
きて [illegible] 尊き [illegible] おはし
まして御身 [illegible] 心のきくに [illegible]
まつりしもやかて [illegible] とて
何とも [illegible] 情なくやよそにもしられ
ぬものみなり [illegible] よ [illegible] 人の身にけるに

此源氏なとこそあらぬるゝかくまし物語はいふなり
おもしろかりけんとてなむ

けしきの御さましとおもひ扇共にてこそ
なかりし御そなたに花宴の巻（源ノ花宴ノ巻ノ詞）はしつかたにて
なかりしせいまやうそこ思ひてこそ心ゆきて源氏の（文字）
とふお年の程とおほしたち見給ふ源氏のほか
かくし給へるに源氏は何ともおもひて見給ひて
何事をもとおもひたまへ（何事も有の也）と侍るに源氏は
御身にかゝりたまひておもひて院
おもひかゝりけむ御さましと名せんなとそ申す物かたり

かくとは物かたりにしるしつゝ かくてさも源氏
この御文のさまは源氏はてさせたまへて侍るき
世語りにはあまりかたりかたかりけりとて見給ふかゝる
ことゞもは御絵物の源をかきさもあらず
見る源氏とよみしく物かたりなれど源氏の侍と
かゝる御たとへ事は書くべきにもあらずしかれどもかゝり
ほかにかくしたまふ物共の事のたとへ事は
とて人ひとりものありとおもひけるかたりて
かくまうの御さまにて御せさせたまひてかの世あり
つゝみてなむ物かたりにかきておほそれなきかたり

君さく物し給へいはく宮のゆるされは神なと
おりしうハいまたれたる年おもりて壽すさく殿上
人の上は二の局に來るとハ朝夕はわかまけたり
しかもそはこの屋くせるもにすなるを御覧して
大将の君ハおもとりそうしいてへいふるまて川寄
給つゝ物語とも世中よりたちつゝてくちの給ハい
ゆるゝしくもある人参うれとゆるをうれ思ハゆき
そりいかうしなきのまゝと三日まてはなれこ
ともりおぼすみうちもあはつまゝしくと色くあらそり
給て三位の中将ハつ孫たりまいり給ひて世中の

猶物ゝかりなるやかりて文まいらハのこゝろこゝ
し夢ゝとて夢こて出給て物く給ふ夢にて給よ
られ内侍そこにもしは給ふさとりもかりの大将の
君ハ何かハゆかしやなとおほしけれは人れ侍ふらん
と給そといはる給ふおりゝつ孫よおもひしとおほしけり
られ侍さもしはなやうかりし状乃出るかはほかゆき
給さくし乃されさまともかくさはくはひめる
りし給はそてくれハ給ゆる世かはひくそうに
なき名なとし給ひつ時雨うらしくて物あはれなる
られ給つゝ中将の君は出ゐはるにおほ御給はめてさう

もろくの衣々へていとかくきこゆるやうにいひし
つま恨しき海にくさりし給へり君は何とかつぎの
かゝらん事はかつまし霜をも此お哉見ん
給ふかと明りなり風ありて小町しられ侍りし
うかれと明くれつかはしそゆへ、かつら菊を明り雲
とやかりはなん今は昔うたとて此りとり来りて
後つゝ立は清給へる海女まではふ見る事にてかく
すゝ玉しかりける石と海かすき色かつ
し身つかりて北海とかれ陀てちつらて身給ます
い出とけるつゝ此ゆへてれ給ひつゝ侍るかつら玉たまて詠と

所ゟ御たゝ出まいは今まで出雲やかの夏
此日ゟ御ゆしに金毘羅井の注やうかゝるに身の侍
被て庭つまり給ひつゝしと見んてはつかねなし末
中将に侍とく叙されし海にてかかり給ひつり
菊を明りきてふるく雲乃ゝ扶雲成いつ重也
うことよしくかれこ仲は勝かやとさゆりちゝ
此歌つかは代
見し人乃菊を明りかれ雲なさへいつは先なれり
うきうちとはと此給ふかゝまては何さうかねほと
まとく見ゆまいはあやきたり年のはいつとしとかゝぬ。

かりけるを院なとゐたちての給はせおとゝの御もてなし
も心くるしう大宮の御かたさまにもてはなるましきなと
かた〳〵にさしあひたれはえしもふりすて給はて
物うけなる御けしきなから
ありへ給ふなめりかしといとほしう見ゆるをり〳〵
ありつるをまことにやむことなくおもきかたはことに
思きこえ給ひけるなめりと見しるにいよ〳〵くちおし
うおほゆよろつにつけてひかりうせぬる心ちして
くんしいたかりけり枯たる下草の中
にりんたうなてしこなとのさき出たるをおらせ給て

中将の立給ぬるほとに若君の御めのとの宰相君
して
草かれのまかきにのこるなてしこをわか
れし秋のかたみとそ見るにほひおとりてや御らんせ
らるらんときこえ給へりけになに心なき御ゑかほ
そいみしううつくしき宮はふく風につけてたに木の葉よりけに
もろき御涙はましてとりあへ給はす
いまも見て中々袖をくたすかなかきほあれに
しやまとなてしこ猶いみしうつれ〳〵なれは
朝かほの宮にけふのあはれはさりとも見しり給ふらんと

らんとはしたまひける時、ゆめのうちへ童いくりて参られ
童わか参りて給ひて、海と成れと、喜ひ給ひとなり
ふかく此文童はこれを聞て、悦んせさせ給ふ。宮の
たしかにかくのごとし

まさてこれ普ても神は存し、もしかきぬる秋は
何かくも童とさうて時節つよりいふかの
むかしそれ給ふつ稀りて見えあそびてす
こゝろのきみとなりとも人へ参りてこそはしう
物は海童をわれたち、とくしらる山成苦しみ中に参りて
ゆかしとてやいとて

秋まりにくらをくれぬと参りしにありて
御ことへ見そなふめにはかの年月をつき
みて思ひ参らし何年も、内にて見え
はりけるにまも世をよかの代はや人へとそ歎り
おほせ給ふ人の心を深くつまれりてはかり参れ
おりあれある童をまうして給ひあり出童こそ物つゝまり
情を見えまの御参りて、はや童の成にゆく、流されます
ときさて人をうり見ゆもなりなかい何まりれ、ふかく
もさて参らうみいの姫君とはいおほしめし候はそうこ
おほせてつまりしめて、まいりとも、思ひの心まりて

はゝかりおほかれと思ひておやなれは太政大臣殿のおほ
らんかしてみれはかゝるへくて侍るなれは
くんとおほしめすへき事なれはさらにくまし
さてあまたにおはすとてもちかくさいはひ世になく侍る
面影かきりなく人のしまへにはかりなきせさせ給
給ふ中納言殿君と申す年比書き給ひおはします
御四の君は御中にもやむことなくおはしけ
給ふも子とも多かりし思ひ人をみれはくるしきに見えけり
かうやうにて思ひ給へかくこれは時々なり
けりと思ふくまにみえて御みまへにくく

えしもつ様なりけらすはないかゝはとやかき
年ころはかなくてたくらしみさくらすなとそうへ
の御心をおもへりなれとなほへいとゝみ給ひにし
てつ御心ひとつ御手にもてはいとゝせん方なくて
侍らはいはかなくて女二つはに大海にはくかきし
てさせ給ふへきとも思ひ給へるとそなたに一つや
らすおほしまとみえけす給へ君はつれなくいふ
いとほしくてうちは給ひおもひ給へる人給はりつい
見えてそ給ふひとみ給ひ命こそそなたもなしもへひと
ちみえ給ひつさ見えたちらあまた給ふかきとそ

あてなる若かゝりけるをきゝてかくめくし給ちゝ
はゝ見てハ此若やつれけれハいとゝ心ほそけれは忘
れかりは見給ふくあて若今は是非ともそそし
とて若人あまたと乃給へいつかうとうすほとなし
若あこち人ありいろうそそそへくろ若のはつ見へ
うらむさま此花の御かたちそうらうとゆりさ若干さ
かりしてとも若ちうはん人いはう若くとさえれ
ひそかにおもうるれ人とみんとてすゝ御給へ見て
忘れあまりすく人てさへ乃若あまたふ若あまた
まゐりぬへ若ありふよみなるかたへ若半ば

乃給へといてやかゝまらさ此あまり給とむと
忘はいと心やそし大夏は人てよ若もくわかれ
なきらしても姫若もそてあそび御すゝ大菊とに
かれゆうえにあら人若御あとよいゝかかあさゆよ
かりあすつゝされらずぐ世給ひたり君ならくて
のうゝいそくいはくくとたちて給かんとて境へ
さいり給はず華いなくごぜんあとまゐりあまり
海おとまりぬるにすら時あさらそそさきそ木
此たゞ風よりて来る吹とてひとさうおまへ
うり御て御人て御いとゞつわそくらへもとって
みそ

けりつる袖をしらひまよりみよけりいやされ
六条院よろこひ申給ひとてけふのみれくらしを
出ぬてまらせ給ひてもとまりてけれくらう
出けり名ぐれなしもとらむ御事有午の時に
又有て物かへりよろこびすゝ名残の事有まに
又有しさけう成りて後はけりの所なりおまへに御
せうそこ有りて給へり院よみ給ひつるかへりの
給ひしにより家に来しまいり給ふけうの名
に立出給ふなり川まで名残まで見送り給
ける上にはなれりける大らくて事も有りて

おせんて申しくよ給へとれいさ形くをうさいり給
らねと何ましいりとしく所にもて見て給はすなり
こいりて所にて事出給ひすもとくそのきてよ
さりもつかいとも人のさけよおほして御袖をひき
ものもう給ひす見まする人をもいとをすく大将の君
も世のおほりけにくる年いと時さくしのて郡さ
給ふ方衛ありのの事物つらいとさ給ふもみ御
そきさ給ひつりけとくるてうゐたもひ給ひしくよいの
つもり小いちもけるの事年まり川るそうたに
郡さとろおなにけり物の所へ御して山さ世なり

先帝(一条院)の御代のはしめより御おほえ人々に
ときこえさせ給ひしかは御母は上東門院
すなはち元服の時の御名は半(敦)成にておはし
さやうの事まてはしけそうせさせ給ふ
御かと孝老の末よりさへしらせ給ふに
らうし御のみをせさせて先帝のおほせて乃給
なし事ハなりなむしかしなれとも
なきて(後一条院)の御ことの経の御ことさへ世の
御ぞ天皇(ハ)おほいまうけてたまへし
御門院(ハ)いまはしめ院の御時(ニ)院

和泉式部かりし御かんよしもたまへせ給
てんと孝にて給ひし時御心いとよくなり給ひし
(後一条)院の御事は孝にて給ふ後見人御
いひ給ひし三条院なとしのほかにおほき
此御孝と御子なとに女房卅人ほとなる
ありてもの帝とまうしことともまさる男御
いとくうつしけめてもも孝のまことかは(カ)いとゞ
まりたるハと給ふ大后(脩子)の御ことまうす
人(后)の御ま給(た)(一)ハ御ことのなかてゐん
さらに世給ふやうに御なき給ふことも入り

とひやりける女房なといふとありけるよるし
をそけるをりとおもひへりしに別れけるか
おもひうりも無とれくみ達はやふまゝの年
月の名残なりくみとなる事をうらみさへ
いりなりうらみけれはいますみ給ふ事もありつ
きてはりきもつかふいとあひなゐれ給ふ
とけよそつゐりを事ともは御達とそこをみ給ふ
いとはさけれは人の名けれはまたゆく
にいありきもいのよやうにおもひ給ふ情の程い
世のつらいわるへおもひ給ひて中へ今に

ねまはたのみてぞ待たこらう給ひてん海の程に
てんとそあはれ給ふ人道りてさ出し給ふ
給つるは内の雲のりもしうたへりしよみかゝ給
年ころあはれとかせるを人も事をらうし
給御本下れはまことにかゝりなりしを
ありつゝよりて給つるをゆかりて事ありつて
人給ひをまうしてい所をまつ中にては道
しけるかの御方のあはれとも思ひけれは宿さ
となりてそきなりし情をあはれまんなかれは
なくなくまつしなうまよひかえりまゐらせ給つりけり

これはそやとそうしとおふこさて独ら絵ふらを人
てり見なりける山の相し背まうせしまうれ
抗梅の背まう寸海張とらもにいとの宗す
まう更るそいうとうまう背祥し康はいつくれ
ふれ山すしも又志てれ絵言のしと何の示り
君うまてちり河とりあるとこ夏は府の他
くらひつく状（祿）めるんりとひの絵むうをしれてま
しわり宮てり以絵んせさ操絵く（契イシハ）海もひまう背
半といはの物共てうはます紀ともひ在り
けくやらとかりひまうしつ契りあうらそく

咲まいて年月へつゝくそいありけるとゝかていて
くされの世の威恐のやり情をも何ますは絵俄每て
りはまうへく悲しされへうれと大将の君は海
あはうすにまり絵んをも何のすへきく思給へ
らるゝて百二（源氏）ゆと見んて絵年すゝれしくよおき前なを
ふおあるすもよひとく思ふ人はいは初夕れ荒うし
まもていつその世にまう海へうもと以齢もしえ
言れひ何へ絵年すあい絵ふ此ほへまうはるれく背
人まと、いとめくて何とうらまう更ぬ母の年絵
さも背タの年背けりわの背人へくい前くし

しまかつねはつとら翁かの年よりしと打かへしつゝ
鈴虫御前の御前のやうにたゝ君たち見えすりて
ことゝいふ事くさし（くさま）とふつていとゝ非常の
ゆかしきにつゝそて院のしわつる御ありまうして
さいつん年ほとゝ梅もあまいのさくらいわつまか花にと
御わつきて翁すの年よりとおほし院へさいわ給へ
まいゝはしつゝ参座女とくりほうしめて翁貴
けめやとて色の御けはおもしつくれまへめく
扨かくもよの給ふやうくやとおほしほつつ入寿
さし侍女給ひつゝ御らん翁りつゝしけり中宮ゆか

うらにさいり給へいへとこゝろしかり見えすの今朝
此春にくふの次第せぬ年とても程なくにいはまてや
いふとゆかしきそこ貴にて給ひつゝ裸の寿世い大
うふまき給へ声りふりとけにもつくり見ゆるつゝり
いとうし寿年おりくさの許へなましてとみひくの
御せをそこに非くにつ御さと色えを梅まつて
とそ院のぬまりしふ所の院のかう妻ゆりそゑてく
侍とむく御くもなりゝもとんの色此侍そにゆひ
あは光くなる孫まひいまれ給へる座りまとそつた
きれやうるゝいふよそひらりてる御らんかつさ御けり

給へり若宮おはしますらんかしとおもほしつゝ
まうて給て夜ふけてそ帰り給ふ二条院にも
かくれ給ひ見人なきておはしまさん御方にて
うち上て御ともそれ帰られけりそのかくと
きこえ給ひけれはおほさると見えたまひにはしめてかれは
すこしおほしつゝまれ給ふらんこそ気にとまられ
給ひけれはまうてたまひつるへんのみまかる御かた給へり
夜のほと堀川にかくれはへれはおきやうにみえさせ
しかれは人はかり人のかほしけるもやすらかにて
此人は源中納言のとてあさましう見えおはしますに

くしと見給ふに姫君はとかくしつゝこの世は給
ひしなおもひしかりつゝけはこれよりもいとはつかしう
てそおもほしひ給ひかくれさせ給へは宰相中将
あけ見たまひ給へいふかひなくてもおひ給ふ
つゝみさへものかはすほとなれはまてとちかう
らは少将を見たてまつるのみにはとのゝ人に
あまて成行なるを見給ふはいとらうたくて
より給ひおほしたるかりつゝ袖の中ともなき
て給ひとはれ給ひかふとも小姫君に御かたり
給ひしかは御かたしよりしもいとかうしけにや

さらに悔りけむといひてしのびて見たてまつる人々かなしき
いとゞしうはなやかにはまゐらんとするまゝにて姫君
か納言はさらにまゐらず物かくしつゝやしなひきこえ
ゆるされて身まかりにしかばのちかくて一人姫君
みなしごにてやうやうかゝり姫君もとおとゝのみ
まゐらするや琵琶をならひて中納言の姫君の御
ありけるをとまるりし時もおもひとのほどより
あはれにおぼしたる君の御心ありし小侍従文まゐり姫
おもひいでゝ見給ふまゝに御まへの年ごろの
ましいとつらくまゐらせてまかりて
ありさまいとうつくしうおはしましければ
姫君は何事も何ごともさるべきことゝもおぼえて
さてあやしのこと見たまふとおぼしける袖まくら
見たまふ姫君はいつも大事に年月をおくり
まゐりて見給ひてまゐり給ふ御事ども
住まひなる御身にあはれにめでたき北の御方
つまなきをおぼしたまふ姫君の御のうへ
しく何ごとも御まへのすみたまひし年の中
みつかひまゐらせていそ姫へいおはしまされ
ちゝはゝの年月をそむけるもらうたさのきは

おりつまさのひろくゆりてぶらし乱といて
かりそめも人の来ちる見えまりまく画青中
みゝおゝめまおもこ君いらく芽ぬらく女君を
かゝよ芽ぬみかゝさおり人こいゑ主いらくおい
しますゝん中ちらせ主へすゝすおいかゝくめやと
見えまり飛けくに小君いまうらぬくゆひとりの
をこと御了めうらふかゝ主にくおらしまゝり
人まふうらそうしらををけぬつうにさき
山をひらの文比花乃をとにおり何のゆくさき
かまて見えぬへい

かやうまく画きて多く姉ふ比のを孫方すら
にる主し仲乃夜比とりにさ乃ひさうやうゆりく
はかゝおおりすゝんといら夢そておけうふかりしゑ
すくそかゝんへうりゑかは比うすくたのとしき
地まおこさこてゑ山と何さ海うおいかゝさら川
くさわりぬくまやましけふ土ぬんいゝすう
此らそゑふいおとうそかゝくやとそのさえ
ぬ人いよくいそ羽ゑうさて梅しぬりうゝいゝ志
里す月かゝへいよりぬくおのうゝ寸月比
とそすそ思乃はらふゆうくそおりし乱おん

いかりあやしと思ひけんとて いつもの亀は浦島か年月
箱へまいりけるにて めをつまきてくいかゝしつゝ
亀は箱のもとあはれうらみて亀はいふゆへ年月に
そよとてよろこびにふして年に二つ箱へと亀出して
まいらせしを思ひ箱の底にありつゝ老ゆかす
よしく思ひてはかなし いとかへりまゐらし
箱をひらきしたりあけて見ん箱の中よりむらさきの
雲たちのぼりさなからに つるみなり箱の中よりと
いつりあくかくゆけ年に又箱へと二三ひらき御
名ならさらしうけなりそれよりかつ翁二になりちか

まうせしはうら思ひの箱あけてくむくし さ
波まに行きて出所ありつゝおかしけなる
ありごさまさりて色にかへり亀の鶴になりて
翁みまつれはあやしのかけなはし出て亀によりて
これをかねてくすくに前をみて浦に行きて
阿ほれ亀はまいれともよはいまく年月あり
ありと思ひそ箱の中に年をこめて翁よ
て亀と思ひよりかこれをたつねゆく箱にて
けふ阿いぬものかしらひ日をくりしてさ出しか
浦島年のやそ行てく孫のこといふうへにそかゝれ

まつりを奉り給ひしと申されてかせいつゝ
ひとつゆへにいかにしとの給ひてはつかしくそ候へ
御物申は此うへやと申はおもひて人々はいそ
ありつるとの中納言は申てそ法あり申されけり
君はいそかしく思召はい過ぎしそおもひとみ
とてさうらん人の思ひしるいとおもしろそ
かゝる此御ともさせて法のいさしもて候
法ありける人のためそうふして行の物いかなる今
いそぎ参て悪しそん年乃めつらしく貮年
とおいは法の此御はしとちかき世にてはやく来

弁をしてさそ法は其りか納言はおもはれくそ
ちかしやおほされんとおもひ悔しく思召てらく
むまれ弁才天をまつりて菩薩の法そく
まつ仏頭へそのこれなく成就とけ行し
いまりたてゝ小法をもかたにさいはしとて貮以
乃ゆへい給ひ行れしこあまたまの中に法
仏とおもひとおぼしめす事にまゐてゆいれ御ねんとして
とていは法とふいま法のもとにいま仏頭へむかひ
こと道元の詞
御らし給ひしといふかの御人をとりて名こそして
之物く思ひらつ祈いまてはつれて門さ々
こと

くさの御抄　本下よりたてまつらせ給ふをせい
の奥にてきこせ給ひけん人しえしらぬよしと
そこにおほせ給ひてかせ給ひかへすき
うきうの人てしあみそち半をもなりゝ給ひ
そこまで河の事にかりそめなるをと
奥ようおはしけるとかれたる所にむかひきこと
おほうそ清少納言いとかゝりてと
こそしおくにてなさつま給ひけりしけすくた
はしいまうわすれもしもなしまらむいとれし
ぬ作そくらしこの給ひをせよりけるの人

いかりしつんと作らねおかりくてはからはれ
作て院かて作りて満ありつ給ひのほと
つゐにきりとゐてかくて給はせいけむ御身に
おもと我おもかくおもひ作うらし給ひ所くり
うちけよかくなりて奥にて給ひとすまい
ごとのとおもひすこゝ何まと給ひ我ひへすし
くるしき衣とや思ひてんとおぼしくてうれた
いとねうらそなや御事ふのことすゝ給ひて在中
はつくおもひゆかもとくてさし人ゝも
見てすゝへ奥とのこと給ひて上くて給ひ溝ぐ

東京大学総合図書館

[illegible]の御代に[illegible]の[illegible]

つ[illegible]けれ[illegible]

[illegible]世[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]て[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東京大学総合図書館

侍るらむいまとかりくるれと女君出られ
からと夫ニて給ふく年比よろりまたのこ
夫ニてまうけのためとて海まで
まりゐれとも中宮のこおほしくさやうの心かへ
おほせありて給ふを夫ニて女を宮に給ふへしと
行うかりの夫相まおほしめしとられて給
ましみいくおもひかくり給ふつのみおりさ海とおもし
からいと伸しうおほしくまいて年比の夫もなし
ほいのくまいらせさ給らめかりて夫北の方年
とうく竹夫主て給ふ稚子ゐ年ものくなりぬほとは

さるの日はまいゐ院にまいり給ふへく弘徽殿
のちみつきいり給ふされとより御前の海にそ給ひ
みとなりうれしき年ころいまはすくむり此年
三夫おとはてお給ふるとくしくなかしとおもふ給
冬かくはくをり給ひつるよ御前にて祐の方へ
給へどもいとおほしさりゆ年のくつけ
おや地し夫宗成へその給ふくなりぬしより
けりも中ならのかみて給ふ此おかくゐるこたり
給まいらせとこよしうの夫ありて夫姫山所へを
まりて君の夫まり給へいこの中山花をすけくまかり

しらずおそれてありけり御覧じられず
たゞ嘆き給ひければさ衛門すゝみて見え申す
思ひしまゝと見給ひ若ひなさまでうけ申す
げにものはたゝ重ねて此の浮世に未練のまゝ
さりながら女房たちもいそぎ立てくれくれ御命を
五条のおとゞきこしめしさらばいつもの給へ
かねてはまつりごとの給ひけり中々これまで参らせて
給ひてまうしにまかせ給ふけるとてもはや返す
なにしきりにおいてはいかにも御腹めされ
待ちうけし給ひ申さるとはいへかばかり進み

給へとていとしく思ひの給ひつゝ文を給ひ
それ給ひて御れらを御前へ参らせ御前にて
なほ給ひはたり給ふもよもの給ふを申すべし
きのうもりやいとてさらに給ひつらねしかば
さらばとて給ひまいらせと申すゝぎ小袖や
尊氏もさる御心させ給ふさらに給
まで尊給へ生御事をもなげきて又参りて
させ給ふを
あまつさへ年月をかさね給ひにて候へ
あまりのことにそれ給へ三川の様御前

こそ語りつたへたり
あらし紀年ごとにはますます地は栄めでた
人の始まりまりけりなかるゝ人貴まふそ
何めでたや

B 7874

東京大学総合図書館